

程度は様々であった。

(2) 胸部 X 線上、両側肺にびまん性陰影を呈したものは 6 症例であった。うち 3 例(サルコイドーシス、粟粒結核、アレルギー性肺臓炎の各 1 例)については ^{67}Ga シンチで経過を観察したところ、胸部 X 線像の改善とともに ^{67}Ga の集積の低下をみた。他の 3 例は、特発性肺線維症 2 例、肺炎 1 例であった。

12. 縦隔腫瘍における ^{67}Ga , ^{201}Tl シンチグラフィの評価

吉村 広 田口 正人 島袋 国定
城野 和雄 坂田 博道 小山 隆夫
中條 政敏 篠原 慎治 (鹿大・放)

組織診の得られた縦隔腫瘍 62 例(悪性リンパ腫 13 例・悪性胸腺腫 12 例・良性胸腺腫 9 例・良性奇形腫 9 例・その他 19 例)に ^{67}Ga シンチを施行し、腫瘍描出能を検討し、うち、同時期に ^{201}Tl シンチを併用した 22 例について、両核種の腫瘍描出能の対比検討を行った。

【結果】 ^{67}Ga は悪性病変の 86% (24/28)、良性病変の 12% (4/34) に集積し、集積の有無による良・悪性の正診率は 87% (54/62) であった。胸腺腫 (18 例) の腫瘍径と ^{67}Ga の集積の有無をみると、前後径が大きいほど集積する傾向があった。一方、 ^{201}Tl は悪性病変の 100% (10/10)、良性病変の 33% (4/12) に集積し、集積の有無による正診率は 82% (18/22) で ^{67}Ga (19/22) と差はなかった。両核種の集積度を $++$, $+$, $-$ の三段階に分けると、 $++$ はいずれも悪性病変にのみみられた。 ^{201}Tl の sensitivity は 100% (10/10)、 ^{67}Ga の specificity は 92% (11/12) で、両核種は縦隔腫瘍の良・悪性の鑑別に有用であると思われた。

座長のまとめ (10~12)

星 博昭 (宮崎医大・放)

演題 10 はサルコイドーシスを対象として、ガリウムシンチグラフィの有用性について検討したものである。シンチでは全身の検索ができることが有利であるが、ステロイド治療による変化の追求には血中 ACE の測定が有用であると報告した。演題 11 はガリウムの肺へのび

まん性集積を示した症例について検討したものである。びまん性肺集積は約 1.8% にみられ、多くは悪性腫瘍の化学療法後にみられた。数週間後に胸部 X-P にて異常の出現するものもあるが、大部分は特に問題なく経過していた。演題 12 は縦隔腫瘍に対するガリウムおよびタリウムシンチグラフィの有用性を検討したものである。縦隔腫瘍の良悪の判定にガリウムが有効であると報告されたが、タリウムシンチグラフィについてはさらに検討が必要であろうと考えられた。

13. 心拍同期心プール像における心筋収縮異常と刺激伝導障害の位相解析

伊東 昌子 藤本 進 林 邦昭
本保善一郎 (長大・放)

正常および各種心疾患 55 例を対象に、心拍同期心プール像の位相解析を行い、脚ブロックにおける心室間の収縮遅延・心筋梗塞における心筋運動異常を検出し、客観的な把握に有用であった。ことに、WPW 症候群では early depolarization という現象を客観的・視覚的に把握することができ、従来心電図のみから把握されていた刺激伝導異常が、位相解析にて定量的に評価できることが示唆された。

また、各種心疾患の phase delay の平均値・標準偏差、さらに normokinesis, hypokinesis, dyskinesis を示した局所心筋壁の phase の平均値・標準偏差を算出し検討した。

14. うっ血型心筋症における核医学検査の有用性

平田 展章 仲山 親 中田 肇
(産医大・放)
花岡 陽一 中島 康秀 (同・二内)

うっ血型心筋症は原因不明の心筋疾患でありその基本的病態は左心腔の拡大および収縮性の低下である。今回われわれは心カテ検査あるいは臨床的に本症と診断された 6 症例に核医学検査を行い、その有用性を検討した。心筋シンチでは左心腔の拡大、部分的な左室壁の欠損および右室壁の描出を示す例がみられたが、心プールシンチでは、E.F. の著明な低下、心筋梗塞でみられる局所的